

【報告】

平成28年度一橋大学附属図書館企画展示実施報告：「一橋大学と東京外国語大学」展

長名 大地

(学術情報課利用者サービス係)

一橋大学学術・図書部

はじめに

一橋大学の歴史を振り返る際、あまり知られていない事実として、東京外国語大学と統合されていた過去があげられる。平成28年度一橋大学附属図書館企画展示では「一橋大学と東京外国語大学」[図1]と題し、一橋大学附属図書館と東京外国語大学文書館との共同展という形で、この統合の歴史を振り返った。ただし、共同展とはいえ、それは両校で同じ内容の展示を行うことを意味しない。「一橋大学と東京外国語大学」というテーマを互いに共有し、それぞれの立場から独自に統合の歴史を振り返ることを意図している。そのため、東京外国語大学では「東京外国語大学と一橋大学」(会期：2016年11月1日～2017年1月末、会場：東京外国語大学附属図書館1階ギャラリースペース)[図2]と、校名の順を入れ替えた企画展が開催された。

本稿は「一橋大学と東京外国語大学」展の内容、および、講演会「東京外国語大学から見た一橋大学」(東京外国語大学文書館研究員・倉方慶明氏による)の報告である。なお、本展の企画・運営は、一橋大学附属図書館の展示ワーキンググループ(大田垣耕司、金井朗子、筋田千春、林田幸子、夏目琢史、稿者の計6名)が担当した。

## 1. 企画展示について

### 1.1. 展示概要

平成28年度一橋大学附属図書館企画展示「一橋大学と東京外国語大学」は、2016(平成28)年11月1日から18日(10時から17時)にかけて、一橋大学附属図書館展示室で開催された。土、日、祝日は閉室したが、一橋祭開催期間にあたる11月4日から6日(9時半から17時)は開室した。開室期間は合計15日間で、入場者数は887人に上った。

## 1.2. 展示内容

一橋大学と東京外国語大学が統合することになった歴史的経緯を振り返っておきたい。一橋大学の起源となった商法講習所は、1875（明治8）年9月24日に、森有礼（1847-1889）の私塾として創立された。翌年に東京府へ移管され、初の公立の商業学校となるが、1881（明治14）年には商業学校に対する周囲の無理解によって廃校の憂き目にあってしまう。かろうじて農商務省からの補助金を受けられ、再開にこぎ着けたものの、東京府下の銀行、会社等から資金援助を受ける必要があるなど、学校運営は困難を極めた。こうした状況下、1884（明治17）年に東京商業学校は農商務省へ移管されることにより、初の国立商業学校（東京商業学校に改称）となる。

同年、文部省もまた、新たに「高等商業学校」を東京外国語学校の附属に設置している。こうして同時期に、異なる管轄下に置かれた二つの国立商業学校が誕生するという、前代未聞の事態が生じたのである。この状況を快く思わなかった森は、1885（明治18）年に、両校を文部省所管に統合させることを決めた<sup>1</sup>。その結果、東京商業学校と東京外国語学校、および、高等商業学校の統合が決まり、新たに「東京商業学校」としてスタートを切ることになったのである。その際、新校舎は東京商業学校のあった木挽町ではなく、東京外国語学校の神田一ツ橋に構えることになった。以降、1899（明治32）年の東京外国語学校が分離するまでの約14年間にわたり、現在の一橋大学と東京外国語大学は一つの学校として歩みをともにしていたのである。

このような歴史的経緯を踏まえたうえで、本展ではこの激動の時代に本学を支えた教員に注目するとともに、彼らの薫陶を受けた学生たちに焦点を当てることにした。第一章「Captains of Industryへの道のり」では、本学の成立過程をたどり、『東京外国語学校一覽畧 本校所属高等商業学校規則 明治17-8年』（東京外国語学校、1885年）等、統合当時の資料を展示した。また、W・C・ホイットニー（William Cogswell Whitney, 1825-1882）、矢野二郎（1845-1906）といった本学の創立に欠くことのできない人物を取り上げるとともに、商法講習所から東京商業学校、高等商業学校、東京高等商業学校へと移行する過程に迫った。第二章は「海を渡った教員たち」と題し、明治期に本学を支えたお雇い外国人、および、日本人の外国語教員（主に英語教員）を取り上げた。とくに、本学に長年勤務し、英語教育を支えたアレクサンダー・ジョセフ・ヘアー（Alexander Joseph Hare, 1847-1918）、国際水準の商業教育をもたらしたエドワード・ジョセフ・ブロックホイス（Edward Joseph Blockhuys, 1862-1931）、そして、東京外国語学校の独立に尽力した神田乃武（1857-1923）の三名を、

彼らゆかりの資料とともに紹介した。「羽ばたく学生たち」と題した第三章では、高等商業学校で学んだ卒業生や学生にスポットライトを当てた。二葉亭四迷（1864-1909）、平生鈞三郎（1866-1945）、佐野善作（1873-1952）、福田徳三（1874-1930）、左右田喜一郎（1881-1927）らを取り上げ、彼らの紹介とともに、彼らが学生時代に取り組んでいた部活動を取り上げた。また、統合後に「前垂派」と「書生派」と、校風の異なる両校の学生が二分されていた時期があったことなどを取り上げた。以上が本展の概要である。

### 1.3. 室内レイアウト

一橋大学附属図書館に設けられた展示室は、床面積を48㎡（8×6m）とする長方形のホワイトキューブである。本展は、一橋大学と東京外国語大学の統合の歴史に焦点を当てるといふストーリー性の高い内容であることから、とくに展示室の構成に工夫を凝らした。展示室の中央にT字の壁を設置し、空間を左右に仕切ることによって、壁伝いに室内を一周できるような導線を設けたのである〔図3〕。また、このT字の壁の両脇には、本展のために展示ケース（400×1800×1105 mm）2台を発注した〔図5〕。さらに、展示構成を順序だてて理解しやすくするため、各章に章カラーを設けた〔図4〕。序章と終章は紫、第一章は青、第二章は赤、第三章は緑とし、対応する解説パネルや、人物パネルにも当該色を反映させた〔図6-9〕。これによって、視覚的にも構成を把握しやすいよう心掛けた。

図書館での展示という性質柄、展示物の多くが図書や文書といった（モノクロの）紙資料から成り、単調な印象を与えてしまう恐れがあることから、本展では肖像画や、掛け軸、シルクハット、机といった図書資料以外のモノ資料を積極的に取り入れた。とくに、展示室後方に設けたステージ（900×1800×300 mm）〔図10〕には、根岸佶（1874-1971）らが愛用した机を配し、その上にシルクハットをマネキンに載せて展示するなど、展示空間に変化をつけた。

### 1.4. 解説パネル類

本展では、解説パネル30点と看板1枚を掲示した。各解説はワーキンググループのメンバーで分担して執筆したが、デザイン、および、製作は、株式会社東京スタジオに依頼した。内訳は、ドライマウントによるパネル25点、トロマットによるバナー5点、展示室前に掲示するための看板1枚である〔表1〕。なお、展示資料に添えたキャプション38点は、すべてワーキンググループのメンバーが作製した。

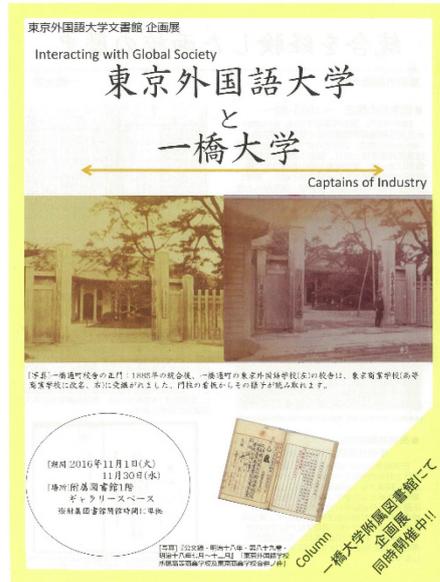


図1 展示室外観（「一橋大学と東京外国語大学」展）

図2 「東京外国語大学と一橋大学」展チラシ

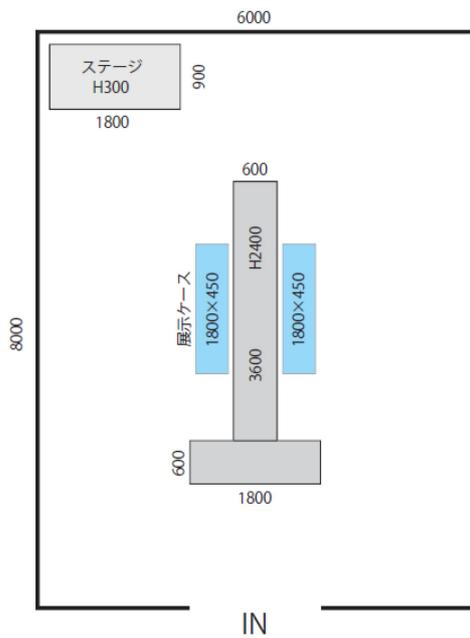


図3 展示構成

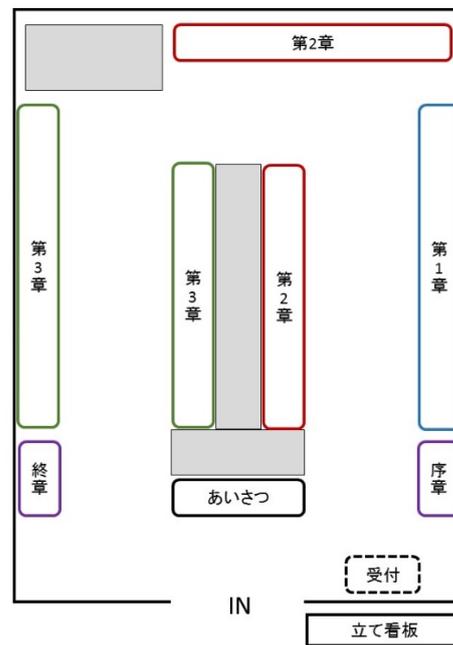


図4 展示室設営



図5 本展用に発注した展示ケース



図6 第一章バナー



図7 第二章バナー



図8 第三章バナー



図9 人物紹介パネル



図10 机、シルクハットの展示

表1 解説パネル一覧

内容	種別	形態	サイズ	点数
あいさつ	パネル	ドライマウント	B1	1
入口銅像写真	パネル	ドライマウント	1200×900	1
序章、終章	パネル	ドライマウント	A1	2
第一章、第二章、第三章	バナー	トロマット	900×1800	3
解説	パネル	ドライマウント	A1	7
解説	パネル	ドライマウント	B2	2
人物紹介	パネル	ドライマウント	B2	12
展示室前案内看板	看板	粘着シート出力+ラミネート	1330×1190	1
ステージ背面	バナー	トロマット	2000×1300	1
年表	バナー	トロマット	900×1800	1
キャプション				38

## 1.5. 広報・刊行物

広報活動としては、ホームページのほか、『HQ Hitotsubashi quarterly 一橋大学の「今」がわかる広報誌』52号(2016年10月)、『如水会々報』1027号(2016年10月)、広報誌『BELL』149号(2016年10月) [図11] で周知し、10月下旬に館内でのチラシ配布を開始した。また、講演会に併せ、本展図録『一橋大学と東京外国語大学 黎明期を支えた一橋人』を作成し、講演会参加者に配布した [図12]。



図11 広報活動(左から『HQ』、『如水会々報』、『BELL』)

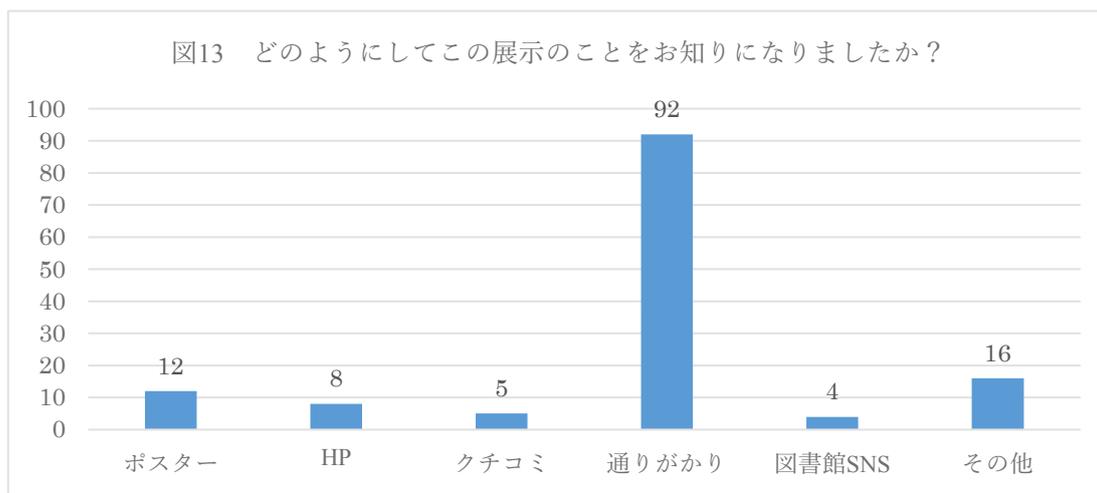


図12 左：チラシ 右：展覧会図録

## 1.6. アンケート結果

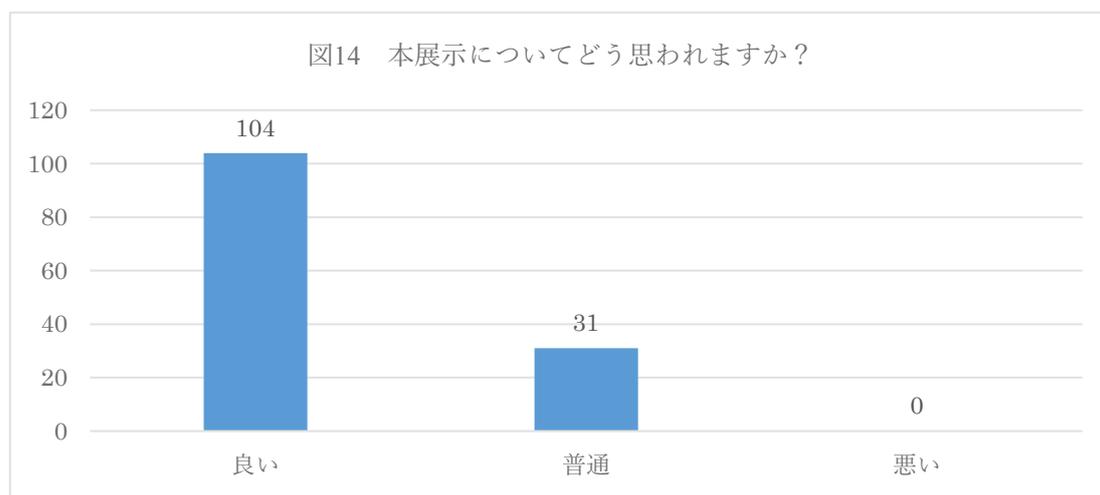
本展では、これまでの企画展示と同様に、来室者アンケートを実施した。回答件数は135件にのぼった。総来場者数が887人であることから、およそ15%の来場者からアンケートを回収できたことになる。

来場のきっかけを問う「どのようにしてこの展示のことをお知りになりましたか？」[図13]という項目では、「通りがかり」が92件（68.1%）と圧倒的に多かった。その他のポスターや、ホームページ、クチコミ、SNSの選択者が少ないことを鑑みると、効果的に広報活動ができていなかったことが窺える。事実、ポスターの掲出とチラシの配布が本展の直前となってしまったことや、即時性のあるSNSをうまく活用できなかったことなど、いくつかの要因があげられる。次回以降の展示では、この反省点を生かし、広報活動の見直しをする必要がある。



次に、「本展示についてどう思われますか？」[図14]という評価に関する項目では、「良い」が104件（77%）、「普通」が31件（23%）、「悪い」が0件（0%）と、およそ80%の方々から「良い」という評価をえられた。感想欄には、「東外大と一橋大が同じ学校であったことに驚きました。蔵書展示がすばらしかったです」や、「外語大と深い関係があったとは！今まで全く存じませんでした」、「一橋と外語大がひとつの学校であった等、知らない事が多く、ためになった。ありがとうございます」、「一橋大学と東京外国語大学の独立した過程についての歴史が良く理解出来ました」など、好意的なコメントが多数寄せられた。

他方、「外大についてももう少し説明があったら良かった」とか、「壁で展示を区切っている点が今までの展示と異なり斬新だと感じた。モノ資料や写真も充実していて見応えがあった。一方で、紹介されている人物が多岐に渡っており、全体のストーリーが読みとりづらい印象もうけた」というコメントも見られた。本展が一橋大学の歴史を中心に構成したために、東京外国語大学の要素が薄くなってしまったことや、共同展であることを周知し切れなかったことが要因と考えられる。また、「全体のストーリーが読みとりづらい印象もうけた」という点については、章バナーや解説パネルだけでなく、キャプションにも解説文を載せていたために、読まなければならないテキストが多すぎた感は否めず、そのために全体像がぼやけてしまったと考えられる。次年度以降の展示では、取り上げるべき事柄のバランスと、適切なテキスト量を練る必要があるだろう。



以上、アンケート結果を踏まえると、いくつか反省点はあげられるものの、展示自体は高く評価されたといえる。展示内容が高く評価されたからこそ、なおさら広報活動が不十分だったことが悔やまれる。展示準備に追われ、東京外国語大学との調整がうまくいかず、情報共有ができないまま開催日を迎えてしまったために、共同展であることを前面に押し出せなかったことも要因としてあげられる。次年度以降は計画性を重んじて取り組む必要があるだろう。

## 2. 講演会について

### 2.1. 講演会概要

展覧会最終日に当たる2016（平成28）年11月18日の14時30分から16時にかけて、関連企画として講演会「東京外国語大学から見た一橋大学～いま1885年の統合をふりかえる～」を一

橋大学附属図書館会議室で開催した [図15、16]。講師は、東京外国語大学文書館の研究者・倉方慶明氏が務めた。平日の昼間にもかかわらず、参加者は36名を数えた。

## 2.2. 講演内容

講演会では、一橋大学と東京外国語大学が統合された1885（明治18）年の出来事を中心に、その歴史的経緯が解説された。とくに、統合後の教職員の異動（東京外国語学校から東京商業学校へ移動したのはわずかに6名のみ）や、学生の処遇（大半が東京商業学校へ再入学。しかし、二葉亭四迷など一部の学生は退学した）について取り上げていた。

元来、東京外国語大学の歴史からすれば、「庇を貸して母屋を取られる」出来事としていささか恨み節で語られることの多かった両校の統合について、本講演で倉方氏は肯定的な側面を提示された。およそ14年間にわたって一つの学校として活動をともした両校は、分離後、それぞれ大学昇格へと歩みを進めることになるが、その際、一橋大学は実用教育から専門教育への移行を志し、東京外国語大学は通弁養成から外国語と地域事情に精通した学校作りへと邁進することになる。倉方氏いわく、この両校が大学昇格へと向かう推進力として、一橋大学側には東京外国語大学出身者である書生派（高度な教育を求める学生）の出現が作用し、他方、幾度も廃校への圧力を受けながら存続し続けた一橋大学の抵抗力が東京外国語大学側に作用したと示唆したのである。こうした側面は、今後、両校の大学史を振り返るうえで、重要な視座となるのではないだろうか。



図15 講演会の様子



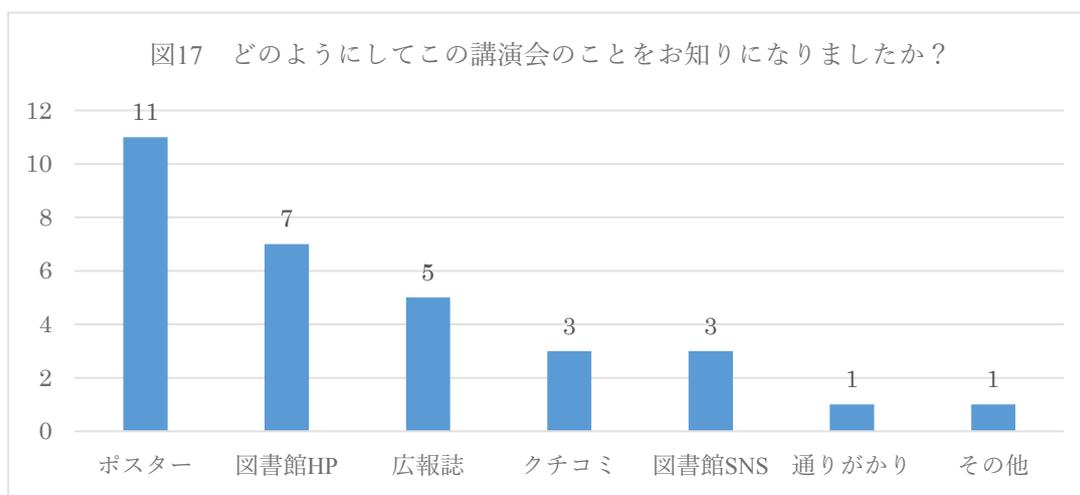
図16 講師の倉方氏

## 2.3. アンケート結果

講演会当日は、36名の参加者があった。企画展示と同様、講演会でも来場者アンケート

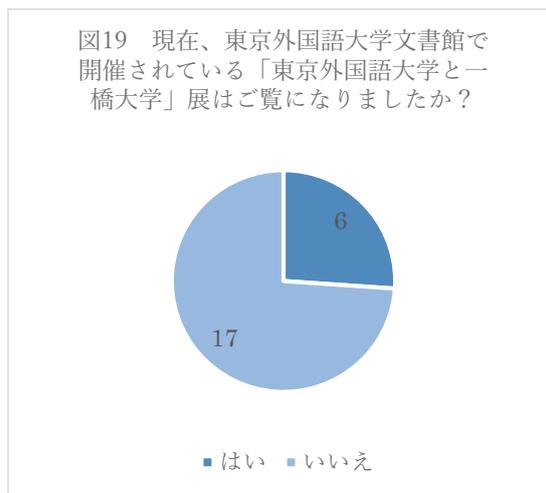
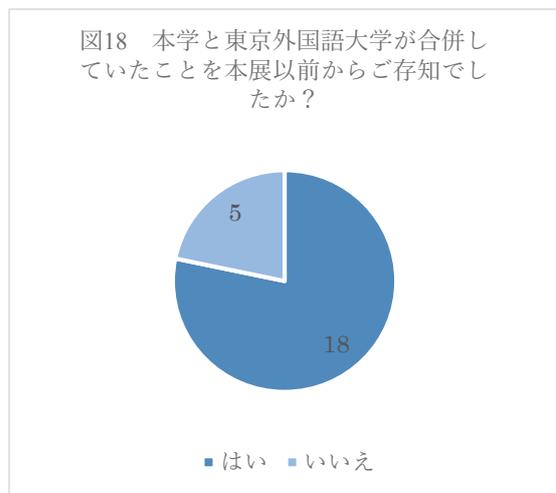
を実施し、23名の方から回答を得られた。では以下、アンケート項目にしたがって分析していきたい。

「どのようにしてこの講演会のことをお知りになりましたか？」[図17]という質問に対しては、ポスターが11件(47.8%)、図書館ホームページが7件(30.4%)、広報誌が5件(21.7%)と続いた。これらの数字と、「通りがかり」が1件(4.3%)であることを踏まえると、参加者の多くが事前に講演会に参加することを決めていたことが窺える。この点は、次の質問に対する回答にもつながっている。



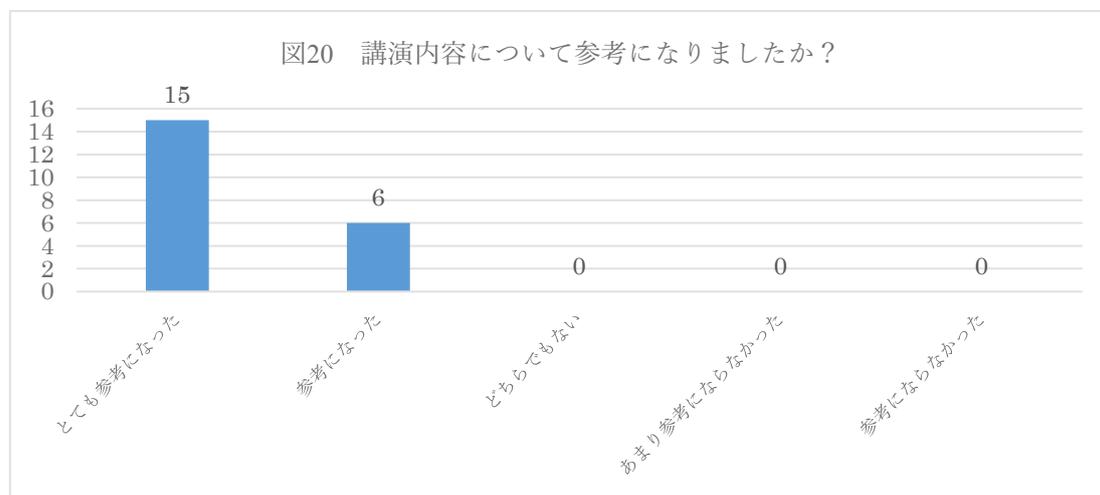
「本学と東京外国語大学が合併していたことを本展以前からご存知でしたか？」[図18]という項目では、「はい」が18件(78.3%)、「いいえ」が5件(21.7%)だった。この結果は、両校の統合について知らなかったというコメントが数多く寄せられた展覧会アンケートの結果と対照的である。このことは、講演会参加者に一橋大学の教職員が含まれていたとはいえ、参加者の多くがあらかじめ両校の歴史を把握したうえで、東京外国語大学からの視点で語られる一橋大学の歴史に高い関心を持って参加していたことが窺える。

次いで、「現在、東京外国語大学文書館で開催されている「東京外国語大学と一橋大学」展(会期:11月1日~30日)はご覧になりましたか？」[図19]の項目では、「はい」が6件(26.1%)、「いいえ」が17件(73.9%)となった。「いいえ」が多い要因としては、東京外国語大学文書館のホームページで展覧会情報があがっていなかったことや、一橋大学から同時開催の広報を積極的に打たなかったことなどがあげられる。この点に関しても、両校で共通のチラシを用いるなど、広報になんらかの工夫が必要だった。



「講演内容について参考になりましたか？」〔図20〕という質問に対しては、「とても参考になった」が15件（65.2%）、「参考になった」が6件（26.1%）で、それ以下の評価はなく、参加者の多くが講演会を好意的に受け取ったことが伺える。

最後に、「本講演ならびに本展に関するご感想をお書きください」という自由記述欄には、「統廃合がもたらした変化というのが大変興味深かった。結びも良くあきないプレゼンでした！ありがとうございました」、「両大学に勤務してきましたが、にもかかわらず、基礎知識というか、知らないことが多く、今回の機会をきっかけに、すこし本を読んで調べようかと思えます」、「非常に深い分析に感銘を受けました。1次資料の重要性を学びました」といったコメントが寄せられた。その一方、「正門の所に明日の市民大学のポスターが貼ってあったが、同様目立つところにおいて宣伝されればいかがでしょうか？大変よい講演だったので、もっとたくさんの人に聞いてほしいと思いました」という指摘もあり、またもや事前の広報不足が悔やまれるところである。



おわりに

これまで「一橋大学と東京外国語大学」展に関する展示内容、および、講演会について述べてきた。反省点として、まずもって広報活動の改善をあげなければならない。次年度以降は、広報活動に重点を置いて、来場者数の目標人数を具体的に設定したうえで、目標達成のための手立てを検討するなど、計画的に取り組む必要がある。

一方、展覧会自体に対しては、高い評価を得ることができたといえよう。その理由としては、両校の知られざる歴史というテーマの選択に加えて、展示室に設置した T 字の壁による空間演出や、肖像画や掛け軸などの図書に限定しない多様な資料を展示したことが功を奏したと考えられる。

最後に、東京外国語大学で開催された「東京外国語大学と一橋大学」展 [図 21、22] に触れておきたい。同展では、本学の展示と同様、両校の起源から統廃合に至った経緯に触れたうえで、附属外国語学校が高等商業学校に設置され、その後独立し、やがて大学設立へと邁進する過程を、10 セクションにわたって紹介していた。東京外国語大学のギャラリースペースは、本学の展示室とは異なり、2階にある附属図書館へと通じる開かれた空間となっている。そのため、来場者数の確認や、来場アンケートなどは実施されていなかったことから、本学の展示と単純に比較することは難しい。しかし、展示企画者の倉方氏によれば、外語祭の期間中（2017年11月19日から23日）、1日平均500から1000人の来館者があったという（外語祭期間中は附属図書館休館日につき、附属図書館への通過者は含まない）。また、展示を見た学生からの反響として、「東京外国語学校と商業学校の同じ正門の写真は統廃合の様子を如実に表しており、興味深い」や、「独立後の東京外国語学校に商業学校の学生が参加していたことは意外だった」、「外国語の必要性や商業教育の推進など、両校の歴史が当時の政策・関心に影響されていたことが分かる」などのコメントが寄せられたという。東京外国語大学側からすれば否定的に語られてきた統合の歴史を、共同展という形でその歴史を振り返る機会が実現できたことは、両校の歴史にとっても極めて意義深い出来事だったといえるのではないだろうか。

本展は、一見すると無関係な大学同士が、大学史や所蔵資料を通じ、思わぬところでつながっていることを示す貴重な機会となった。展覧会を準備する過程で、一橋大学の黎明期から、東京外国語大学との統合・分離を乗り越え、現代にまで引き継がれた原資料の数々と触れる機会に恵まれた。その中には、当然のことながら「高等商業学校」や、「東京高等商業

学校」といった蔵書印〔図23、24〕が押された図書も含まれていた。蔵書印は図書が所蔵された段階で押されるものだが、これら校名の異なる押印は、激動の時代を乗り越えてきたことを物語る証左でもある。改めて、蔵書が時代の生き証人ともなることを痛感した次第である。



図21 「東京外国語大学と一橋大学」展の様子



図22 「東京外国語大学と一橋大学」展の様子

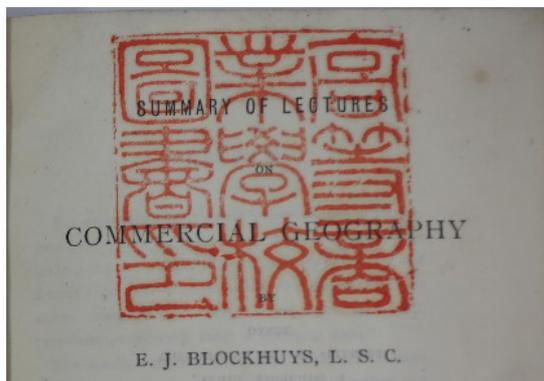


図23 「高等商業学校」の蔵書印

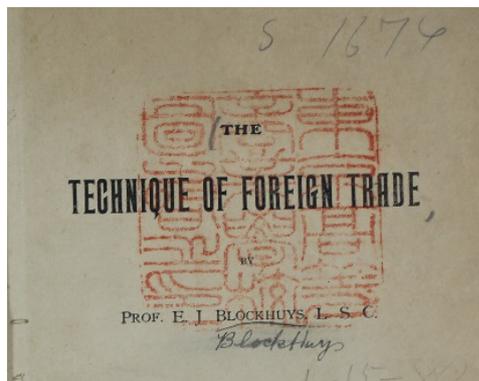


図24 「東京高等商業学校」の蔵書印

<sup>i</sup> 一橋大学学園史刊行委員会編. 一橋大学百二十年史 : Captain of Industry をこえて. 一橋大学, 1995, p. 26.

[Report]

*Report on 2016 special exhibition: Hitotsubashi University and Tokyo University of Foreign Studies*  
Osana, Taichi.

Circulation Section, Library Affairs Division, Department of Libraries and Information,  
Hitotsubashi University